松前志摩守どのへ

〔正齋與古松軒書〕爾後は契濶松竹之壽、愈御安榮御渡光之由、珍重不過之候、當春鴻書落手之處、發程間際至而紛雜、旅中より可及御報と存候處、日々繁冗無其儀、背本懷候次第に御座候、扨不佞去春松前御用被仰付、四月十五日江戸發程、五月十六日三馬屋渡海、同廿三日松前出立、箱館江罷越中候、兼而老人御編述之東游雜記相携、沿途之勝槩、松前之風物比校いたし候所、過差無之、老人一過眼之地、烟霞之妙察、全く山水之奇骨を被得候事と、感心不啻候、夫より東蝦夷地通り、佐原よりエトモ江渡海、凡七里此地は去辰巳兩年、蠻舶イキリス著岸之處にて、海灣凡五六里、ハクチョウの沼モロランなど紆回して、ウスを經アブタに至る、ウスは山水尤勝麗にして、頑石之位置、崎嶼之錯曲、恰も盆山家園之如く、東夷地細景之第一なり、アブタは平坦といへども、是よりヲシャマンベの海岸、青石白巖遙に內浦嶽大里島の眺望亦一絕なり、六月二日アブタ出立、ホロヘツ江出、海濱砂漠シラヲイ、ユウブツ、ムカワ、サル、ニイカップ、シブチャリ、ミツイシ、ウラカワ、ジャマニを經て、ホロイヅミに出る、シラチイよリ凡八日路エリモといふは、海中へ凡三里ばかりも突出たる出崎にて、回船は箱館、エサシより、此エリモを見て乘り、東夷地之風土も此崎之前後にて一變すといふ、シャマニよりホロイヅミ、ヒロウ之間、嶮岨尤多く、巉巖絕壁突兀として、馬足不通、其間チコシキルイ、トモチクシホの嶮、蟻附蟹步始て魚腹を免れ、石頭岸牙を躍步し、飛泉を登り、水中を行て、始てヒロウ江出、是より又海濱砂漠之地、浪烟衣を濡し、砂石面を打、ヲホッチイ、トウブイ、シャクベッ、シラヌカ、クスリコンブムイ、センボシを經て、海を渡ること三里、アッケシに至る、海灣道ありといへども、嶮岨故海を渡るなり、此地は湊泊尤よろしく、海面に大黑島といふあり、廻船はエリモ崎より此島を見て乘るといふ、入江は凡三里餘、奥に湖水あり、廣凡二三里、湖中小嶼數十、皆牡蠣之凝りて島となるもの、奇勝不可言、是ウス以來大景之第一なり、アッケシは古來夷中之巨擘と唱へ、夷俗も殊に正しく、人物